

オーラルインタープリテーションの試み

高 井 收

1. はじめに

最近の英語教育は世情を反映して、コミュニケーション中心の英語教育に向かって進んでいる。教授法も1980年代、それまでのオーディオリンガルメソッドに代わり、コミュニカティブメソッドが注目を浴びている。行動心理学と構造言語学の理論を基礎として開発されたオーディオリンガルメソッドの学習理論はテキストを何度も繰り返し口頭練習することによってその言語体系を内在化し、実際の場面で応用できるようになるということだが、「口頭による単なるテキストの機械的な繰り返しであり、自分で創造した英文を口にしている訳ではない」と批判された。

そもそも、自分の言いたいことを表現する力を付けるためには、それをはるかに上回る「聞いて（または読んで）理解できる能力」が必要となることは、母語習得時における日本語の場合を考えれば理解できる。このコミュニカティブメソッドの先駆けとなった理論がComprehensible Input（理解可能な入力）の必要性を力説したクラッシュェンの「インプット仮説（Krashen 1982）」である。このインプット仮説によれば学習者がその時点で持っている語学力より1段階上のレベルの言語構造を提示し、理解させようとする時に、言語習得が可能となるという理論である。しかし、このクラッシュェン方式は学習者の推理力を要求した帰納法的アプローチであり、ほとんど全てリスニングからとリーディングからの偶発的英語入力に限られている。この方法で日本語を母語とする学習者が教室内においてのみ英語を学習する場合、聞き取りからの無意識的な言語入力を発話に転化させるには多大な時間がかかる。また、リーディングにしても多読から学習者が味わい深い、かつ、批判的な読みが出来るようになるのを期待するには相当な時間を要すると考えられる。

本稿では、日本のように英語を外国語として学習する環境においては限界のあるコミュニカティブメソッドに代わるもの、あるいはこれを修正するものとして、古くからある演繹的アプローチの性格も兼ね備えた教授法の一つで、オーラルインタープリテーションを利用した意識的入力方法を考察し、その実践事例を紹介する。

2. オーラルインタープリテーション

オーラルインタープリテーションとは簡単に言えば表現読みをする音読のことである。しかし、単に文字を口に出して読むだけではなく、作者の意図するところを汲み取り理解し、聞いている人にそれを伝えるという、一種のコミュニケーション活動でもある。もともと、オーラルインタープリテーションは文学作品を音声表現するためのものだった。古代ギリシャ時代には文学は読むと言うよりもむしろ聴くものであった。また、古代ローマ時代には詩人が自分たちの作った詩の朗読や、暗記によるプレゼンテーション（レシテーション）などが行われた。中世においては聖書の朗読においてオーラルインタープリテーションが用いられ、19世紀以後音声の分析研究などを通し、発音、強勢、メロディー、速さ、ピッチ、音質など科学的な考察が行われた。

Oral interpretation was recognized as an art form by the ancient Greeks, and reached its zenith during the Golden Age of Latin literature, the Augustan Age, which lasted from 40 B.C. until 14 A.D.... At the beginning of this century, oral performance was emphasized more than comprehension and interpretation of the literature. Today, the emphasis is on the subject matter—the literary text. Technique is no longer considered as an end in itself, but only as a means of communicating the thought and feeling within the literary work. (Scrivner and Robinette 1980: 5)

オーラルインタープリテーションでは読み手（interpreter）は音読することによって作者のメッセージを再現し、聞いている人（聴衆）にそれを伝えることである。もともとオーラルインタープリテーションは文学的価値のある作品を朗読し、その作者の意図するところを知的に感情移入し表現するコミュニケーション手段の一つであった。材料として選ばれる作品は物語、名演説、エッセイなどの散文や詩、劇の脚本などその範囲は広い。文学作品以外の材料、例えば、新聞記事やパンフレットなどを選ぶ場合はオーラルリーディングと呼ばれるが、本稿では、音声表現全般を、作品の内容を理解して聞き手に伝わるように表現するという共通点に焦点をあて、オーラルインタープリテーションに含めることとする。

3. 日本の英語教育におけるオーラルインタープリテーションの応用

本来、オーラルインタープリテーションは散文や、詩、ドラマなどの文学作品を朗読練習する目的で英米の文学やスピーチの授業で用いられた。近江（1984）は英米の大学では「通常 Department of Speech and Drama とか Department of Speech という、独立した学科の中で開講されている (p.233)」と言っている。そして、次にその標準的な手順を紹介している。まず、学生に朗読箇所を選択させ、その作品からの抜粋箇所を解釈分析し、音声表現の練習をさせてから、その次にクラス全員の前で発表させる。最後に聴衆となる学生、教師はコメントを書いて発表者に渡すという手順である。さらに近江は日本の英語教育にオーラルインタープリテーションをいかに応用するかについて、精読の指導方法、英文を吸収させるインプットの利用方法、作文の指導方法、スピーチを矯正する方法、「総合英語」の指導方法等5つの応用方法を述べ、それぞれ、豊富な事例を挙げて解説している。

オーラルインタープリテーションでは、まず学習者自身が読む作品において文章の意味を理解していなければならない。近年、訳読法に対する批判から逃れるひとつの方法として速読方法が用いられている。しかし、この速読法は短時間に文意を把握し文章の趣旨が分かれば一応良しとされ、読む作品についても新聞やエッセイなど情報を捉えればよいものに限られてくることが多い。これだけでは内容理解だけに止まり、音声表現の訓練などはされずに済まされることになる。また、多様な文章に対応するためにも文学的価値のある作品を語り手または書き手の意図を汲みつつ、ものによっては、そこに出てくる登場人物になったようなつもりで原文を読んでみて、初めてそこに書かれている英語の文章が味わい深く読めると言えよう。ここで大切なのは文章の意味を理解する際に、登場人物の意図や書き手の意図を考えながら理解することである。時には、文法構造上からの分析も必要となるが、あくまで、文章によって表現されている状況、心情をイメージすることである。そして、その次に、イメージしたことを学習者が自分で表現してみるこ

とである。

理解したことと自分がそれを再現できることとは残念ながら別なことである。オーラルインタープリテーションでは作者のメッセージを全身全霊でもって再現しなければならない。「つまり読解行為は、それ自体は究極的には黙読ではあるが、同化が行われるということ自体、これ等の内的感覚がフルに活動し、同化する対象の息遣いや音声、リズム等に、こちら側のからだの感覚が感応し、その文章が語り掛けている目に見えぬ読者との空間、さらには話の内容自体の示す距離等をとらえているということである。(近江、1984:245)」ともすれば、英語を聴くとか、話すことは英会話という特殊な時間だけに限られているように考えられがちだが、他人の書いた文章を読み味わう時にも非常に大切な活動である。英語が聴けるとか話せるということは、英語の体系を自分の体内に内在化していることであり、活用できることである。こうした活性化できる能力があって、初めて文章を批判的に、かつ、味わいながら読解してゆくことが可能となる。

最後に、オーラルインタープリテーションのスピーチ指導への応用について考えてみる。オーラルインタープリテーションでは表現読みを通して、文章の内容を理解し、作者の意図や感情を込めて、意味の塊ずつ音読することにより、英語のリズム感を身に付けることができる。「内面からの働きかけ (working from inside out) と音声矯正 (working from outside in) とを結びつけるスピーチ矯正、音とからだと心を一致させたスピーチ矯正とっていい。(近江、1984:328)」個々の発音やイントネーションはもちろん必要だが、それに加えて状況によって変化するストレスなど英語のリズムが大切である。また、ここで言う音読とは単なる技術的な要素だけでなく登場人物や書き手の心情をイメージした表現読みを通しての音読である。表現読みについて近江は次のように定義付けている。「解釈観についていえば、すべての文章は、広い意味の語りであり、背後に人がいると考える。その語り手 (=書き手) は誰で、誰を聴き手 (=読者) として、どこから、何を目的として語っているかを解明し——すなわち文字になる前の原点としての、生きた潜在的スピーチの状態を解明し——語り手の内面に同化していく。同時に語り手の目的にてらしあわせつつ表現の巧拙を味わっていくことをもって解釈の究極点とする。(近江、1984:62)」

次に筆者がオーラルインタープリテーションの一部を大学1年生の基礎クラスに応用している事例を紹介する。

4. オーラルインタープリテーションを応用した事例

小樽商科大学では1年生の一般英語購読のクラスを「基礎」、「標準」、「発展」と3段階に分け、それぞれ学生が選択できるようになっている。ひとクラスの人数は40名程度、時間は90分授業で1週間に1回の割合で通年の授業が行われ、単位は2単位が終了者に与えられる。今年度(2004年)オーラルインタープリテーションを応用したクラスは筆者が担当する2つの「基礎」クラス(E102Aおよび、E107A)でCAL教室を使用した。教材は宮本節子他著の「マルチメディアで学ぶアメリカ文化 (Inside Stories U.S.A. with Multimedia)」(成美堂出版)を使用した。内容はビデオ教材 (Inside Stories in USA) の映像をベースに、電子ブック型デザインのCD-Romでマルチメディア化されていて、アメリカ文化の諸側面を紹介する社会性のある話題を軸に、テキスト、動画、音声、図表などがマルチメディア注釈機能により提示されている。教科書は基礎編と発展編に分かれていて、それぞれ15章から成っている。「基礎」クラスではこの教材の基礎編を使用した。各章でのレッスンプランは概ね次の通りである。

1. 各章で取り上げられているトピックの背景知識となる情報を紹介する。アメリカの地図が

CD-Romに入っているのでクリックすればストーリーに出てくる都市の所在地なども確認することができる。

2. 各章のトップページ（CD-Romに入っている）にはその章に出てくる全体のストーリーがビデオ化されているので、登場人物、状況に注意をしてビデオを見るように指示をする。学生は一定の時間内に何度も場面を見ることができる。この時点では文字を読まずに映像と音声からストーリーを推測するよう指示をする。
3. CD-Romは電子ブック化されており、次のページから教科書と同じ文字情報が載せられているので、コンピュータ上でリーディングができる。ここにはトップページのビデオが各ページの文字情報の量に合わせて編集されていて、クリックして選択すれば、ビデオの音声を聞きながら読むこともできる。また、難しそうな単語やイディオムは文字情報に埋め込まれていて、クリックすれば日本語によるポップアップ注釈が出てくるようになっている。この方法の特長は、同じような操作で複雑な文法項目も学べる点である。ここでは学生が自分のレベルに合わせて語彙や文法項目のポップアップ注釈または辞書を利用しながら内容把握のために黙読し、最後に教科書に載っている内容に関する練習問題を解答するよう指示をする。
4. 教師の後について全文を音読する。特に英語のリズムに気をつけ、腹式呼吸をしながら、意味の語群（または塊とも言う）ずつ発音するように指示をする。
5. 学生を小グループに分けて、音声を聞きながら朗読の練習（シャドウイング）をするように指示をする。電子ブックが各章につき6ページ程度で構成されているので、1人1ページずつあたるように1グループ6名程度にし、グループ単位で音読の発表をさせ、評価する。
6. 次のクラスの時間までに英語で読後感想文を書いてくるように指示をし、次のクラスでそれに基づきプレゼンテーションを行なわせ、評価する。

次に、具体例として学内に公開した授業を取り上げる。授業参観には5名の先生が出席され、終了後、貴重なご意見を頂いた。

日 時：2004年6月7日（月曜日）午前10時30分から12時00分

授業科目：英語I（E102A）（1年生の英語「基礎」クラス）

授業目標：オーラルインタープリテーションの手法を使って、音読できること。

場 所：小樽商科大学2号館3階CAL教室

題材はジャズの発祥地アメリカのニューオーリンズを紹介している解説文で書かれた第1章の「The Birthplace of Jazz」である。学生は教科書に付属のCD-Romを使ってあらかじめ、第1章のビデオを見てくるように指示されているが、教室でも前方の大画面を使ってビデオを写し、登場人物や場面を確認した。その後、CD-Romの電子ブックにある文字情報を使って各自、内容把握を行い、教科書の練習問題を解答した。語彙や文法事項については各自の英語のレベルによって電子ブックのポップアップ注釈や辞書などの利用度も異なってくるので、教師側にも個人指導が要求され、十分な時間が必要となる。この日は授業参観に来られた先生方にも学生の内容理解度に対するフィードバックに協力を頂いた。この時点で学生は全体の内容を概ね把握していることになる。

まず、教師の後について全員で音読する際に、文章の内容を考えながら場面をイメージして、意味の塊ずつ音読することである。英語は強弱アクセントを持ち、日本語のように文を作っている全ての単語を同じ強さで読むのではなく、名詞、動詞、形容詞、副詞などの内容語は強く読み、

前置詞、接続詞、関係詞、助動詞、冠詞など機能語は弱く発音される。文の中では強い音節は遅くはっきりと読まれ、弱い音節はテンポを速めようとして速く発音される。そのため、母音が「あいまい母音」に変化、あるいは消滅してしまう場合があり、子音の場合には脱落したりする現象が起きる。これ等の要因によって英語のリズムが生まれてくる。次に、音読では1語1語単語の単位で読むのではなく、文の構造や意味の上で結合している語群を一つの塊として一気に発音することが大切である。聴いている人に読んでいる内容とその意図（メッセージ）を的確に伝えるためには文法構造を含め、その内容を理解した上で、適切な意味の塊ずつ区切りをおく必要がある。最後に音読をする際に横隔膜を利用した腹式発声でなければ大きな声は出ない。英語を話すときには、声の大きさだけではなく、[p]、[t]、[k]などの破裂音には息の力が要求され、弱いと無声音と有声音の区別がつきにくくなるなどコミュニケーション上に大きな影響が及ぼされる。

次にオーラルインタープリテーションの手法を使った音読指導を電子ブックの最初のページを使って例示する。

Jazz is the music of America's soul, and New Orleans is the birthplace of jazz. Even now, street musicians can be found all around New Orleans. And not just jazz musicians, but all sorts of performers compete for listeners and try to make a living off the tips of passersby. These kinds of people are one pillar of American musical culture. (宮本、2004: 1)

最初の文はトピックセンテンスとなっているのできっぱりと言い切ることが大切である。Jazz is the music of America's soulで1塊となり、soulのあとで区切ることができる。内容語であるJazz、musicおよび、America's soulは強く発音され、機能語であるbe動詞、冠詞のthe、前置詞のofは語と語の関係など文法的な役割を果たしている。通常、英語を母語とする人たちの間ではこのような文法は共通に認識されているものなので強く発音する必要もないと考えられる。次の意味の塊はand New Orleans is the birthplace of jazzとなり、1息で読むようにすると良い。最初の文では一番強いストレス(primary stress)が話のトピックであるJazzにおかれ、それと平行して次の文では同じようにNew Orleansにprimary stressをおいて読む。初期の段階では、この後(主部と述部との切れ目)にポーズをおいて読むこともできる。文の構造はSVCが接続詞のandでつながっていることを頭において読んでゆけば良い。Even nowは1塊として読み、ポーズを入れる。また、nowのあとにコンマがあることもポーズを入れる目安となる。Street musicians can be foundは「ストリートミュージシャンがいる」ことがイメージできる1つの意味の塊なので1息で読み、その次の場所を表すall around New Orleansは次の1塊として読んでゆく。次の文は少し長いですが、And not just jazz musiciansまでは切らずに読まなければならない。そして、これは次のbut以下の情報と対比しているのでnotにストレスをおいて読む。but all sorts of performersまでは前出の情報との対比なので切らずに読む。できれば、compete for listenersまで続けて読めればよいが、「観客の取り合いをしている」ことがイメージできる1つの意味の塊なのでここで区切っても良い。次もand以下を1息で読めればよいが、「生活を立てる」という意味の塊のand try to make a livingで区切り、その理由をあらわすoff the tips of the passersbyを次の意味の塊として読んで良い。最後の文は文法構造上、最初の文と同じくbe動詞でつなげたSVC構文であるので、1息で読んで良いが、初級者には長い文なので、文のトピック(主部)であるThese kinds of peopleで切り、述部であるare one pillar of American musical cultureを1塊として読んで良い。

教師の後について基礎的な音読ができるようになれば、CD-Rom のビデオを使って、ネイティブスピーカの読みをモデルにシャドウィングする練習に入る。シャドウィングはむやみやたらに行うのではなく、教師について音読した際に修得した表現読みの基礎が前提となり、読み手（モデルとなるネイティブスピーカ）の意図を考えながらシャドウィングを行うことが大切である。シャドウィングの練習は全員が1章を全部する必要はなく、6人1組のグループ分けをし、1人が1ページを担当するようにすれば限られた授業時間内でも十分練習ができる。

最後にグループ単位でクラスの前に出て聴衆を意識しながら朗読を行う。その際、音読で練習した英語のリズムなどに加え、読みながら聴衆に語りかける read and look up などの手法を使いメッセージを聴衆に的確に伝える必要がある。目の配り方 (eye contact) にも聴衆全体を注意する不偏的なものと、一人ひとりを注意する個人的なものがあり、それを組み合わせることも大切である。また、表現読みをするときのジェスチャーや身体の動き (gesture and movement) にも注意する必要がある。これらは、段階を追って指導してゆけばよいが、今回の授業で行った朗読の到達目標は大きな声 (腹式発声) で、意味の塊ずつ朗読できることとし、それが評価された。

5. まとめ

最近、現場の先生方の中から「以前からの感じだが、学生の音読する力がさっぱり向上していない (佐藤、2004)」とか「文の構造がよくつかめていない」など学生の英語力の低下に関する話題が聞こえてくる。それに関連して文法教育、読解教育の見直しの必要性が叫ばれるようになった。これは1950年代のオーディオリンガルメソッドに代わって推進されてきたコミュニカティブメソッドの反動かもしれない。1980年代クラッシュェンがインプット仮説を発表し、「英語は習うより、慣れる」方式の偶発的入力が目ざされ、英語の環境づくりに力を注いできた。

最近でも、文部科学省が中高の生徒に十分な英語の運用能力をつけさせる目的で「英語が使える日本人の育成」戦略構想を打ち立てるなどして、コミュニケーション能力の養成に取り組んでいるが、日本語の生活環境において、学校での英語の授業だけでは、それに見合うだけの英語力をつけることは難しいと考えられる。大学に入学したてで英語による授業についてゆけるのは一握りの学生に過ぎない。それも、留学経験とか、学校教育とは別に英会話を特別に習っていた学生が多い。我々現場の教師はこのような学生を好みがちだが、教育の焦点を置かねばならないのは、むしろ、その他大勢の普通の語学レベルを持った学生である。「大学生になってから音読の訓練をするのはおそすぎる (佐藤、2004)」のではなく、音声訓練ができていないのだから基礎からでも訓練しなければならない。それには、大学生の知的レベルに合った内容の、例えば、文学的価値のある教材で、オーラルインタープリテーションの教授法を応用すればよい。

日本の現状に即した英語教育にはクラッシュェン式の偶発的入力だけでは十分ではなく、意識的に英語の言語体系をインプットしてゆかねばならない。オーラルインタープリテーションの read and look up の手法を使い表現読みをすることは、相手に読み手のメッセージを伝えることであり、読んでいる内容の理解が前提となる。これはクラッシュェンの言う「内容に焦点が置かれた」言語活動であり、豊富な comprehensible input が含まれ、言語習得につながるということが理解できる。

参考文献

- 近江 誠 1984. 『オーラルインタープリテーション入門——英語の深い読みと表現の指導——』東京：大修館書店

オーラルインタープリテーションの試み

- 1993. 「オーラルインタープリテーション」 橋本満弘・石井 敏 (編) 『英語コミュニケーションの理論と実際』 東京：桐原書店：101-112
- 1996. 『英語コミュニケーションの理論と実際 — スピーチ学からの提言 —』 東京：研究社出版
- 佐藤行敏 2004. 「基礎力の向上について」 『JACET 北海道支部ニューズレター』 No.17
- 宮本節子他 2004. 『Inside Stories U.S.A. with Multimedia — マルチメディアで学ぶアメリカ文化』 東京：成美堂
- Krashen, S.D. 1982. *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. New York: Pergamon Press.
- Scrivner, L.M. & D. Robinette. 1980. *A Guide to Oral Interpretation — Solo and Group performance*. Indianapolis: Bobbs-Merrill Educational Publishing.